

新国策 13 8/5/25

〈激論〉 日ソ関係は改善できるか

● 対 談

・砂時計の砂を棒で突つつく……A・ボーピン
 と、その砂は早く落ちない
 ・道路に立ちはだかる大きな石をどけないと、通れない……矢次 一夫
 (伊ズベスチャ紙 政治評論員 本会代表常任理事)

四月初め、ボーピン氏一行来日の連絡があったので、話し合いの場を設け一時間ばかり懇談した。以下はその概略である。

「鵜の嘴の食い違い」という。この対談も終始噛み合わなかったが、しかし、それなりに日ソ関係の現状を表わしていて、興味深い。なお、同席したのは、本間長世・東大教授、神谷不二・慶大教授、中嶋嶺雄・東大教授、銀治田進・銀治田商会社長、ソ連側からは、ゲラシモフⅡノーボスチ通信政治評論員、エフィーモフⅡ同通信東京支局長、クズネツォフⅡ前駐日大使館参事官の七氏。通訳はノーボスチ通信の徳永晴美氏。

(4・23 都内のホテルで)

矢次 日本にとって、対ソ関係を良好に維持することはむしろ大事なことで、これは論を俟たない。ところがここに、一つの障害がある。北方領土問題ですよ。あたかも、道路のどまん中に巨大な石がどっかり居すわっているようなもので、これに始末をつけなければ二進も三進もいかない。ボーピン その問題は、こんなおいしいご馳走を前にして、われわれの食欲をさまたげるほどのものではないでしょう。

これは複雑な問題であり、何しろさまざまな観点、視点があります。みなさま方には、すでにわれわれの政府の公式的な立場はおわかりのことと思います。われわれジャーナリストは政策を作るのではなくて、コメントする側ですので……

矢次 それはたびたびうかがっている。「プラ

ウダ」でも「イズベスチャ」でも「ノーボスチ」でも。しかし、それは日本側が得心していないことを理解してほしい。ここで領土問題の外交交渉をやるわけでもないし、また一時間程度で話し合えることも思っていない。しかし、前々からの経緯を考えると、突然お国が、領土問題はもう存在しないというふうにい出すというのはいい、どういうことですか。前はそうではなかったはずだ。

ボーピン わが国外務省は、日米安保条約に関連して、一九六〇年にすでに明確に声明を出している。われわれは、日本という国を孤立した国であるというふうには見ていません。つまり、日本はアメリカの戦略的な一部をなしている国であると理解しています。日米間の軍事面での緊密な結び付きを、われわれは考慮せずにはいられませんが、しかも、この緊密度はだんだん強まる傾向にあります。

しかし、現時点ではそれが原則的に重要な問題ではありません。第二次大戦は、一連の国境の変更をヨーロッパあるいはアジアにおいてもたらした。こうして決まった国境がまた今後、変化させられてはならないというのが、われわれの立場です。そのためにわれわれは三〇年間、ヨーロッパで戦ってきました。ですから、もしアジアで、それ以外の原則が確立することになると、ヨーロッパにおける原則と矛盾することになるわけです。

したがって、「北方領土」は歴史的な問題でもなく、また地理上の問題でもなく、これはまさに政治問題です。ましてや、この問題をソ日関係の今後の発展の前提ととらえるならば、われわれは迷路に陥ります。

